

## 戦国末期宮崎城主上井覚兼と宮崎衆に関する多角的研究

みやざき歴史文化館  
管理業務課 学芸員 新名 一仁

天ヶ城歴史民俗資料館  
学芸員 福嶋 一恵

研究成果の概要：戦国末期の天正8年(1580)から同15年まで宮崎城主をつとめた島津家重臣上井覚兼が記した『上井覚兼日記』を主たる史料(研究対象)として、①上井覚兼と彼に率いられた宮崎衆の軍事行動の特徴と、②上井覚兼の文芸面の特徴について明らかにした。

### 1. 研究の背景

(1) 平成24年度みやざき歴史文化館にて開催した開館20周年特別企画展「宮崎城と上井覚兼」では、宮崎城の歴史を明らかにする一環として上井覚兼と彼の残した日記をとりあげ、パネル展示でさまざまな事象を一般市民に紹介し、その準備の過程で一部の事例について解説をすすめた。展示は好評を博し、秋・冬の歴史系の企画展としては過去最多の入館者を集めたが、時間的制約もあって日記を体系立てて十分な検証をすすめるまでには至らなかった。

(2) 『上井覚兼日記』は、昭和29年(1954)には活字化(翻刻)されるなど早い段階から重要な史料であるとの認識が学界にはあったが、地元宮崎ではほとんど注目されておらず、これまで十分な分析・検討がなされているとはいえない。先行研究としては、これを翻刻した『大日本古記録』の解題や、斎木一馬「上井覚兼日記に就いて」があり、また上井覚兼の文化受容については、伊東久之「戦国時代における地方文化と京都」が、さらに宮崎衆の構成については、若山浩章「戦国末期の宮崎城下の町」がある。

しかし、これまで本史料を検討してきた研究者の多くが関東あるいは関西の研究者であ

ったこともあり、史料解釈に不十分さがあったことは否めない。

### 2. 研究の方法

(1) 『上井覚兼日記』および「伊勢守心得」から本研究の対象となる事例をピックアップし、その解釈(現代語訳)・分析にあたる。その上で、①上井覚兼と彼に率いられた宮崎衆の軍事行動の特徴と、②上井覚兼の文芸面の特徴について明らかにする。

(2) ①については、天正10年から同14年にかけての、肥後(現在の熊本県)、肥前(現在の長崎県)への軍事遠征に着目し、鹿児島島の島津家からの軍事動員命令以降の動員の形態、動員された宮崎衆の構成、合戦時の編制・指揮命令系統のあり方、合戦そのものの様相について明らかにする。②については、日記に収録された漢詩を解説してその意味を明らかにした上で、その文学的背景・影響を探ると共に、同じく上井覚兼が文化・芸術に関する私見をまとめた「伊勢守心得」から彼の文芸に対する認識を明らかにし、当時の日向国および島津氏家中における文芸の広まりについても明らかにしていく。

### 3. 研究成果

(1) 上井覚兼の宮崎地頭としての管轄地域は、宮崎城周辺の地域一帯（「平成の大合併」以前の旧宮崎市域の内、大淀川下流域南岸を除く部分）と、覚兼個人の給地として与えられた紫波洲崎城（宮崎市折生迫）から加江田にかけての一帯であった。

(2) 「宮崎衆」は、島津家直臣である宮崎「衆中」と、上井覚兼の被官である「忤者」（かせもの）によって構成される。その多くは、覚兼とともに宮崎に召し移された薩摩・大隅両国出身者であるが、覚兼の日常的な地域住民との交流により地元から「衆中」・「忤者」に登用されるケースも確認できる。覚兼が軍事動員できた「宮崎衆」は、300から700名程度であったと推測される。

(3) 上井覚兼の管轄内に居住する武士身分のものがすべて「宮崎衆」に組み込まれていたわけではなく、一部の村（下別符、富吉、長峯、細江）はある程度の自立性を保持し、出陣にあたっては独立した「衆」を構成していた。

(4) 上井覚兼は、宮崎地頭であると同時に島津家「老中」の地位にあり、「日州両院」（新納院と穆佐院に挟まれた現在の宮崎平野一帯）の統括責任者でもあった。鹿児島からの軍事動員命令は覚兼を通じて「日州両院」内の各地頭に伝達され、指定の期日と場所に、あらかじめ定められた軍役どおりの軍勢を準備して出陣させる必要があったが、実際は指定の期日に軍事動員できている事例は少なかった。これは島津氏全体の軍事動員体制の構造的な問題であったとみられる。

(5) 鹿児島からの命令により出陣すると、合戦直前に軍議が開かれ「衆盛」とよばれる実際の戦闘形態にあわせた部隊編成が組まれる。

上井覚兼は「老中」として指揮官となり編成された部隊（備）を率いたが、「日州両院」の衆が必ずしも覚兼指揮下となったわけではなかった。また、覚兼が指揮をとらない戦闘地域で「宮崎衆」のみが他の武将の指揮下で合戦に参加する場合もあった。

(6) 島津勢の戦闘形態にはさまざまなものがあった。攻城戦の前には敵方の城下町や村を焼き払い、収穫直前の稲などの作物を刈り取るなどの挑発的戦闘行為によって敵をおびき出す作戦をとった。また、敵城が少数の場合、「言戦」（一種の挑発行為）を仕掛けて降伏を促すケースも確認できる。

(7) 天正13年(1585)閏8月の堅志田城攻略戦においては、「宮崎衆」ら一部の「若衆中」が事前の軍議にない勝手な軍事行動を起こすも勝利を得ており、島津軍そして「宮崎衆」の個々人の戦闘能力の高さがうかがえる。しかし、天正14年(1586)7月の岩屋城攻略戦においては、特に難所を担当したこともあって「宮崎衆」は苦戦を強いられ、指揮官上井覚兼を始めとして城攻めにあつたもの全員が負傷している。堅固な山城を力攻めで攻略するのは極めて困難であり、攻め手の犠牲も大きかったことがうかがえる。

(8) 合戦に勝利した後は、軍配者の指揮のもと「勝吐気」（勝鬨）をあげ（軍配者が「エイエイ」と叫ぶのに呼応して諸将が「オウ」と叫ぶ）、また「勸請吐気」で軍神を勸請し、討ち取った敵将の首を検証する首実検が実施された。それをもとに軍功が認定されるが、『上井覚兼日記』では敵の首を取る「分捕」に加え、城攻めにおける「太刀始」や戦闘行為による負傷も大きな軍功として特に書き残している。

(9) なお、以上の9点についての細かな検証

過程については、新名一仁「戦国末期宮崎城主上井覚兼と宮崎衆の軍事行動」として『宮崎市歴史資料館研究紀要』第4号に掲載予定である。

(10) 『上井覚兼日記』には、覚兼自作の漢詩4篇が収録されている。これらの漢詩は、臨濟宗あるいは曹洞宗といった禅宗系僧侶（禅僧）を相手にした次韻（相手の詩の韻字を同じ順序で自作に用いること）や、与えられた題に沿った作品がほとんどである。

(11) この時期、島津家中においては、和歌や連歌を嗜む者は多く、穆佐地頭をつとめた樺山玄佐（善久）のように「古今伝授」（古今和歌集の中の語句の解釈に関する秘説を伝授すること）を受けるものまで現れたが、漢詩を嗜む者はほとんど確認できていない。そんななか、覚兼は、天正3年（1575）に島津家菩提寺である福昌寺（曹洞宗）の客僧から絶句（漢詩）を学ぶようになり、以後、覚兼自身が禅宗に深く帰依しみずからも庵主号を授けられるほどの篤信家であったことから漢詩を得意とする曹洞宗・臨濟宗といった禅僧との交流のなから漢詩の技術を磨いていったようである。

(12) 『上井覚兼日記』には、当時作詩の教本・入門書として流布していた『三体詩』やその他五山版（鎌倉末期から室町末期にかけて、京都・鎌倉の五山を中心とした禅僧などによって開版された木版本の総称）の詩集からの引用が散見され、覚兼の博識ぶりがうかがえる。しかしその一方で、覚兼が側近たちに武士としての文芸や遊技に対する心得を説いた『伊勢守心得書』には、漢詩や詩文に対する記述はなく、先人の漢詩を教養として知っておくことのみを重視している。覚兼にとって漢詩は、禅僧との交流ツールとしての側面が強かったとみられる。

(13) 覚兼作の詩を分析すると、禅僧との交流の一環として作られたためか法語が盛り込まれており、覚兼の禅宗に対する教養が垣間見られると共に、深酒を詠み込むなど諧謔心にあふれたものもある。覚兼にとって漢詩とは、家に籠もり閑座して詩作にふけったり、ひけらかしたりするものではなく、相手に酬和するために嗜むものであったとみられる。

(14) こうした禅僧との漢詩を通じての交流は、平時における楽しみという側面が強かったであろう。ただ、覚兼が交流していた禅僧たちは、島津家中枢ともつながる宗教指導者もおり、また、金剛寺住持など他大名との紛争等非常時にあつては外交僧として敵陣に赴く重要な任務を託す相手でもあった。島津家老中として彼らとの日常的交流が非常時においても有効に機能したと推測される。

(15) 以上の覚兼の文芸面については、福嶋一恵「上井覚兼と漢詩について」として、『宮崎市歴史資料館研究紀要』第4号に掲載予定である。

#### 4. 参考図書、論文等

〔雑誌論文〕（計8件）

- ① 斎木一馬「上井覚兼日記に就いて」（『日本歴史』81、1955）
- ② 桑波田興「戦国大名島津氏の軍事組織について―地頭と衆中―」（『九州史学』10、1958）
- ③ 斎木一馬「国語資料としての古記録の研究―近世初期記録語の例解―」（『仏教史研究』3、1968）
- ④ 玉山成元「上井覚兼の信仰―とくに晩年を中心として―」（『日本歴史』256、1969）
- ⑤ 伊東久之「戦国時代における地方文化と京都―領国文化の構造をめぐって―」（『中世日本の歴史像』創元社、1978）

- ⑥ 若山浩章「戦国末期の宮崎城下の町一上井  
覚兼在城時を例にして一」（『宮崎県地方史  
研究紀要』25、1999）
- ⑦ 千田嘉博「宮崎城の構成」（『宮崎市文化  
財調査報告書 75 宮崎城跡測量調査報告書』  
宮崎市教育委員会、2009）
- ⑧ 江村北海著、大谷雅夫校注「日本詩史」（『新  
日本古典文学大系六十五 日本詩史 五山堂詩  
話』岩波書店、1991）  
〔図書〕（計6件）
- ① 福島金治編『戦国大名論集16 島津氏の研究』  
吉川弘文館、1983
- ② 福島金治『戦国大名島津氏の領国形成』吉  
川弘文館、1988
- ③ 『日本歴史地名大系 46 宮崎県の地名』平凡  
社、1997
- ④ 『日本歴史地名大系 47 鹿児島県の地名』  
平凡社、1997
- ⑤ 猪口篤志『日本漢文学史』角川書店、1984
- ⑥ 猪口篤志『新釈漢文体系第四十五巻 日本漢詩  
上』明治書院、1972  
〔その他〕  
CD-ROM版『世界大百科事典 第二版』日立デジタ  
ル平凡社、2006